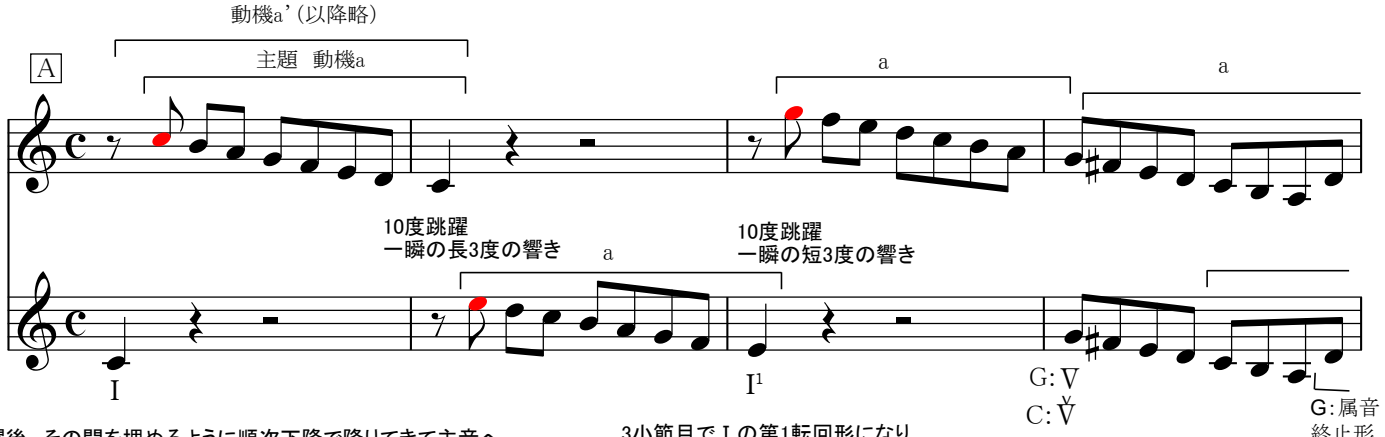
カルカッシの25のエチュード　第1番妄想的分析譜

作曲M・カルカッシ
製作：市川亮平

個人的にこの曲は2声部での進行を想定して作られたと感じ、どちらもト音記号の2段譜で製作しました。
abcなどは動機の分類のためにつけましたが、リズム的動機中心となっております。
分析の7割くらいは妄想で出来ております。

主調：ハ長調　主：ド　属ソ　導：シ



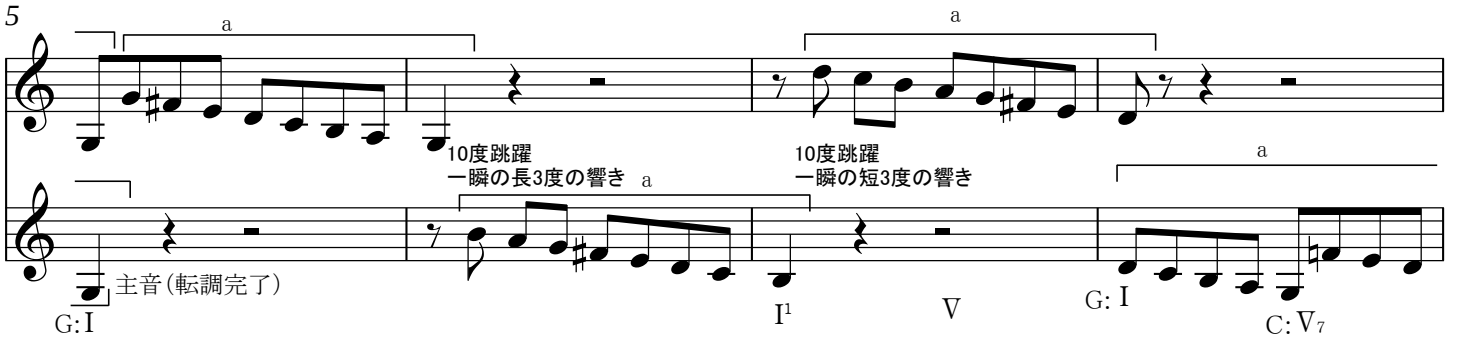
8度上行跳躍後、その間を埋めるように順次下降で降りてきて主音へ。
以降終着音は主音に限らないが跳躍−順次進行が繰り返される。
17小節目まで旋法的な動機が続き、和声は1小節に1つか2つ程度と考えられる。
その分軽やかで長めのアーティキュレーションが演奏に求められる。
18小節目までは和声への意識というより、調性の意識が重要になると思われる。
音階の下行により主音に至る旋法的終止が転調完了を示すことが多い。

動機の捉え方はa又はa'となるがaで捉えるなら1拍目裏の2弦ドは開始音となる。
ややアクセントを付ける必要がある。しかし強すぎてはいけない。
そして次の小節の1拍目で収める。
その場合、2重奏のように立体的な表現を意識すると弾いていても楽しそうだ。
実際に2重奏で弾くのも良い勉強になると思う。
a'で捉えるならaよりも小節単位でのまとまりがでるだろう。
どちらで捉えても良いと思うが私はaで2重奏的楽しさを味わいたい。

3小節目でⅠの第1転回形になり、
3度ずつ上がってきた動機の最高音の上行が終わる。
そして、2小節に跨る長い下行に向かう。
1−3小節で段階的に音域が上昇しテンションが上がっていく。
不安定さも増し、その勢いを利用して転調に向かっているように見える。
4小節目でファ♯が現れ、ト長調を予感させ調整が揺らぎながら
4拍目ト長調属音：レから5小節の主音ソへ。
ここで次のソに向けての終止感を作る工夫をすると転調表現が聴く人に伝わると思う。
私はこの属音−主音でト長調の転調完了と判断するが
4小節目ファ♯でそう考える方もいるかもしれない。
4小節目の和音記号はハ長調のⅤの副5の和音、ト長調のⅤ（属和音）両方を書いた。
どちらに寄るかは自由である。

4小節上声下声ともに同音のユニゾンにした。
2重奏で弾くならこうすると面白いと思っただけで分析の観点からはあまり意味がない。

属調：ト長調　主：ソ　属：レ　導：ファ♯

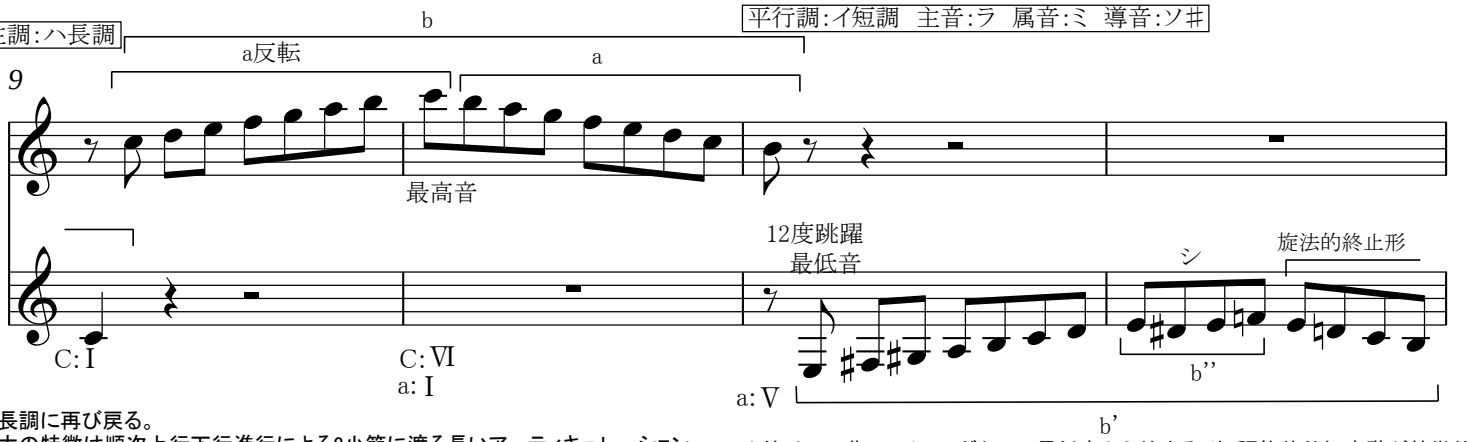


属調に転調完了し、属調で主調と同じように
音域を少しずつ上げながら主題を繰り返す。
1拍目ト長調の主音への着地を丁寧に弾きたい。
また、前の小節の4弦開放レが鳴っていると気になる方もいるだろう。
その場合、1拍目ソを押さえる3をやや寝かせて4弦消音すると良い。
表現は1−3小節と同様徐々にテンションを上げていきたい。

ト長調のⅠはハ長調の属和音であるためここで転調。
レドシラソファミレドと順次下行していきたかったのかもしれないが
音域の都合で短7度の上行跳躍が発生している。
そのため動機の断裂間は否めないが、いずれにしろ旋法的終止形により
ハ長調の主音ドに向かい終止していると考え、滑らかに弾く。

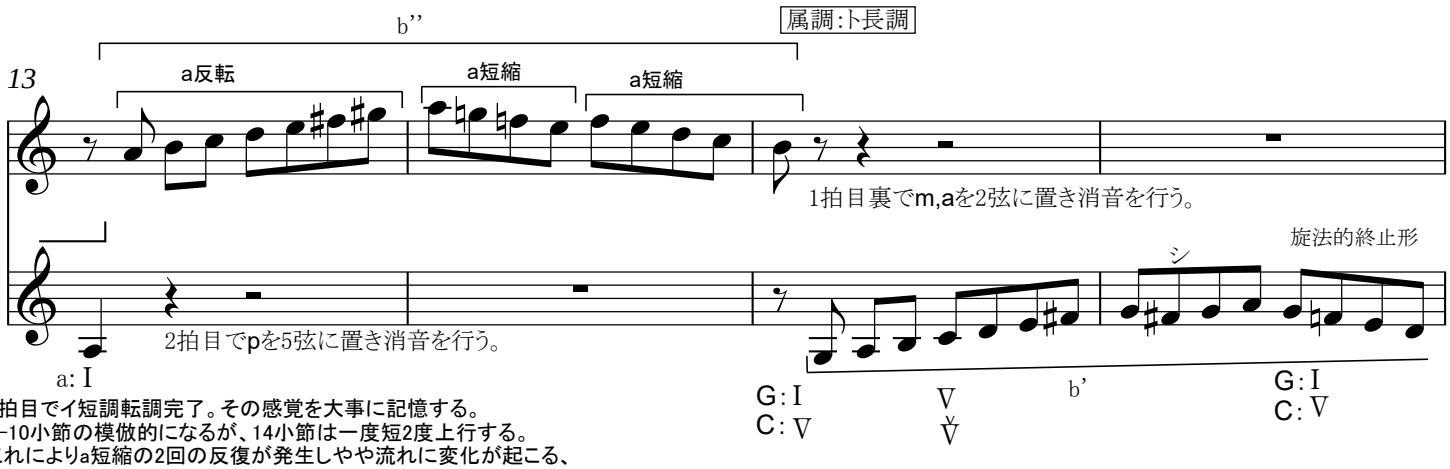
主調：ハ長調

平行調：イ短調　主音：ラ　属音：ミ　導音：ソ♯



ハ長調に再び戻る。
最大の特徴は順次上行下行進行による2小節に渡る長いアーティキュレーション。
リズム的動機はa反転（反行）とaに分けた。
しかし動機bとして1回の呼吸で歌いきる様に区切らずに弾くのが望ましい。
10小節目はまだハ長調寄りだが、11小節イ短調旋律的短音階が現れるため、
ここを転調の兆しとみる。
曲中最高音1弦8フレットのドは何回か出てくるが、強拍での配置はここだけ。

11小節はこの曲の、そしてギターの最低音から始まるイ短調旋律的短音階が特徴的。
前の小節でこの曲の最高音が出てきており、その音程的落差からの順次上行は
「一度落ちたものをもう一度持ち上げねば！」というパワフルな演奏をしたくなる。
12小節1拍目裏レ♯は刺繍音とした。この小節に和音を当てはめるならⅤの副5−Ⅴ7
そして次の小節でⅠとするだろう。
ただ、無理に和音を感じると演奏に滑らかさを出し難くなるので、
私はそれより旋法的終止を意識する。



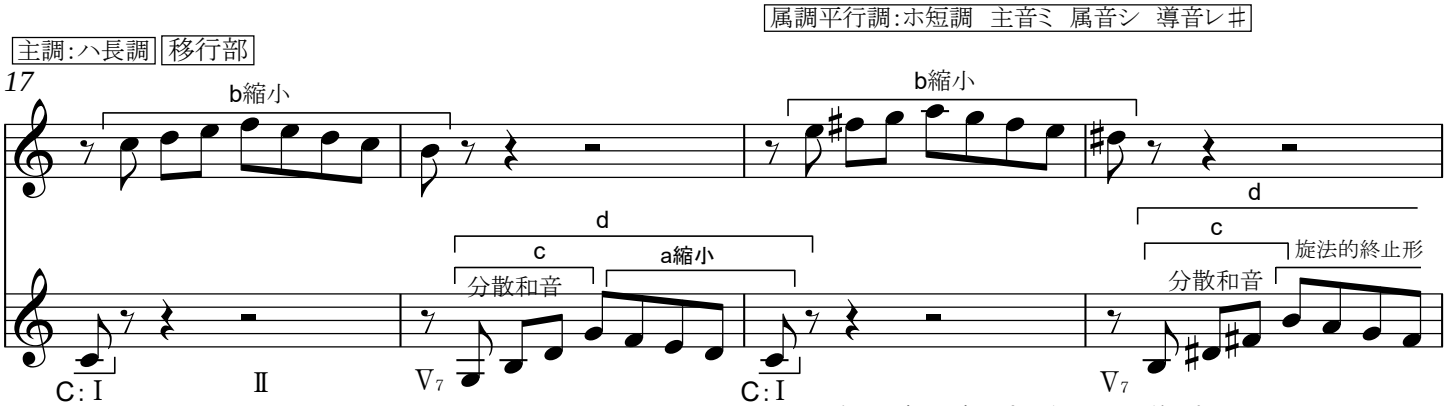
1拍目でイ短調転調完了。その感覚を大事に記憶する。
9-10小節の模倣的になるが、14小節は一度短2度上行する。
これによりa短縮の2回の反復が発生しやや流れに変化が起こる、
あるいは変化させたくなる。

この曲初めての短調的旋律。その雰囲気を出したくなる。
強弱や音色、歌い方など表現は様々。
あまりやり過ぎると古典派の曲らしくなくなるかもしれない。
そういう時は逆に表現を過度ににつけて弾いてみる。
するとここの弾き方が見えてくるかもしれない。
「過度な表現も良いかも」「やっぱり似合わないな」どちらの感想も正解で
その試行が自分の表現的マニュアルを作って行く。

1.5小節ト長調に転調すると捉えるか。
ハ長調に転調し属和音、Vの副5の和音、属和音と捉えるか。
11-12小節と対応しているのでそう考えると後者だが、私は前者にした。

1小節からの大きな流れがここで終わるため、
属調-主調でしっかりした終止感を出したいと感じたのが理由だ。

いずれにしろ9-16、そして17小節と調性のグラデーションが楽しい。
ここまでが第1部とでも言おうか大きな一つの区分となる。
旋法的終止をしっかり意識して主調に戻った感覚を自分や聴く人に伝えたい。

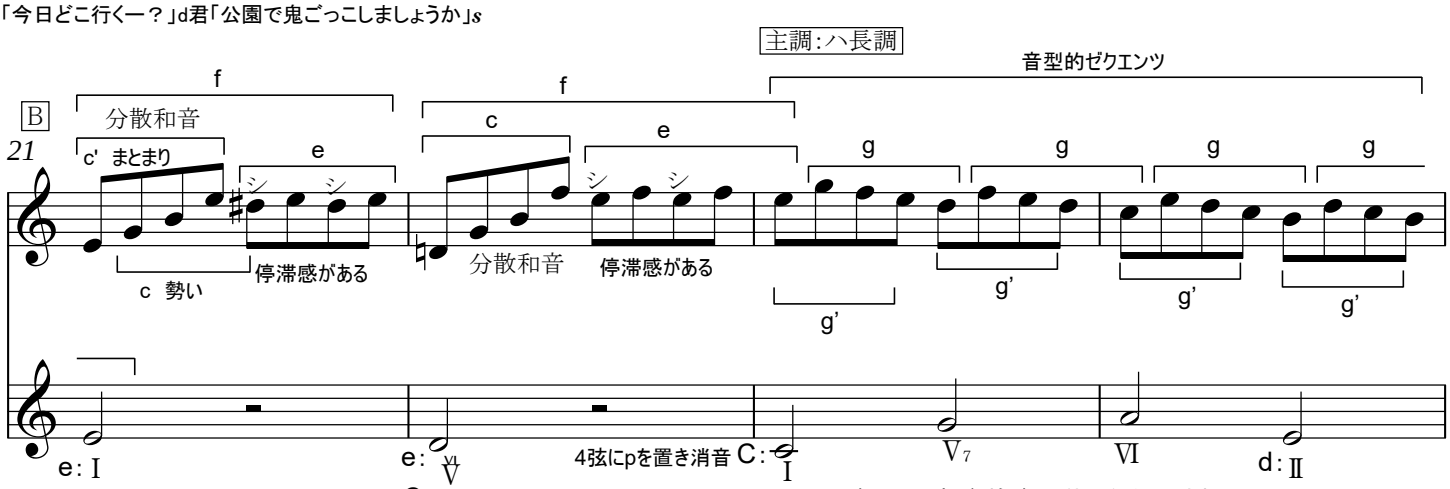


21小節に向けての経過的な4小節。移行部、間奏、推移部、経過部、呼び方色々。
構成は動機bと初めて現れる分散和音を含む動機c+a縮小によるかけあい。
21小節から少し和声的な構成になるため、その準備として分散和音を配置したかもしれない。

そう考えるなら18, 20小節の1-2拍の音は伸ばすのが適切だろうか。
どこで消音するかは各自の判断によるが私は3拍目で消音する。
17,19小節は一応和音を書いたが16小節までと同じで旋法的にあっさり弾きたい。
旋法的動機bと和声的動機dこの対比や掛け合いを2重奏的に楽しみたい。
実際2重奏で弾いたら会話をしているようで楽しいだろう。
b君「今日どこ行くー？」d君「公園で鬼ごっこしましょうか」*s*

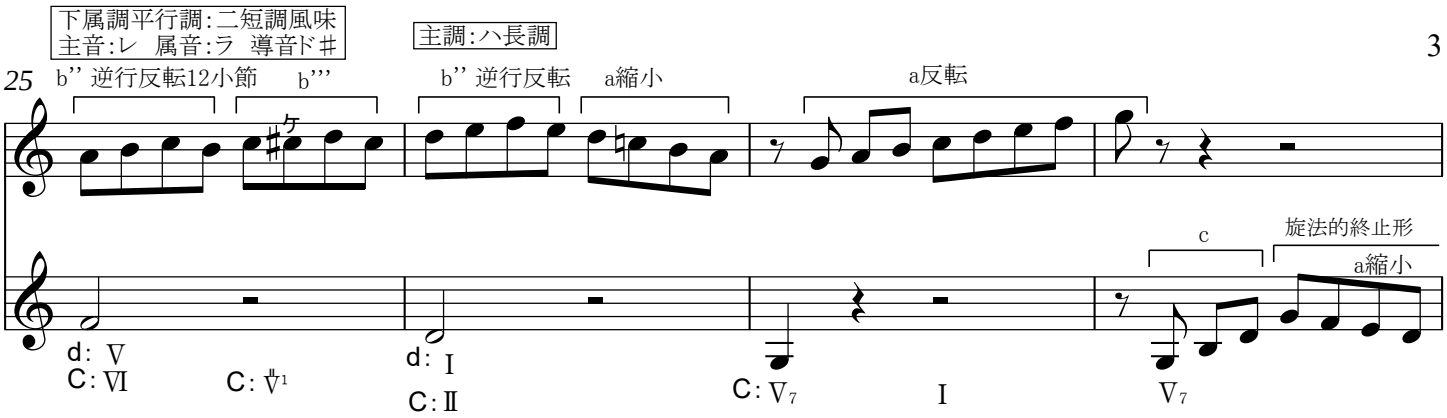
ホ短調に転調。転調完了を私は21小節とする。

20小節でホ短調に移るしっかりとした準備となる。
今までの旋法的終止と和声的終止両方が起こるような箇所だろうか。
17-18小節の主調ハ長調の明るくどっしりした雰囲気から、
ホ短調のしっとりやや悲しく気な雰囲気に変わる。
b君「やべえ雨降りそう」d君「どうしましょう…行くだけ行ってみましょうか」



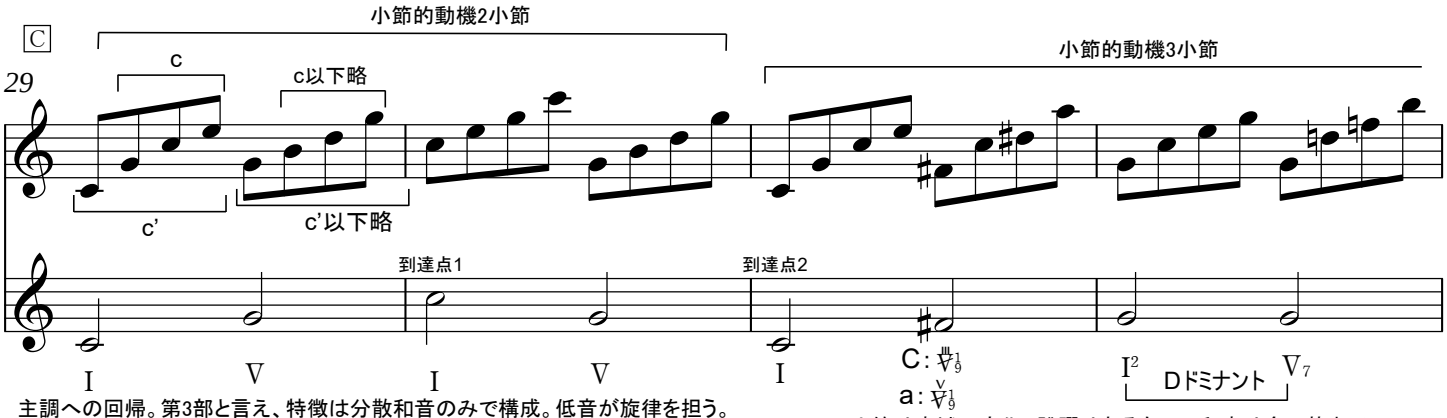
ホ短調に転調完了。ここから第2部。
大きな特徴は伴奏的な低音がはっきり付き少し和声的になる。
上声21-22小節の動機の捉え方をcとc'どちらにするか非常に迷った。1小節a,a'と同じだ。
c'はより和声的な雰囲気が出せ、裏拍から開始される1-20小節との変化が明白になる。
同じ拍から始まり2声のまとまりも増す。c'は勢いを出しやすく感じる。
続く動機eは半音程の2音の繰り返しで解決的停滞感がある。
c勢い、e停滞と対比が起こるのが好きで私はcを採用した。もちろんc'も良いと思う。
eは歌いやすい音の動きで、少しためらうように弾きたくなる。
私はcでその緩みをa tempoに戻したいのかもしれない。
22小節でホ短調のVIの副5の和音（ソシレ）から22小節ハ長調に向かう。

ハ長調に転調。低音が2拍ごとに休みなく配置される
上声音型的ゼクエンツ（反復）。
21-22小節でc'を選んだ方はここはg'を選びたくなるのではなかろうか。
私はgで捉える。
aとa'、cとc'問題と同じでどちらも魅力的だ。
g'は上声下声共に強拍で始まり、一体感や和声感がある。
gは時間的ずれによる2声別の進行を感じ、次に繋がる勢いがある。
私は音型定ゼクエンツ（反復）とgの組み合わせでエネルギーの蓄積を感じた。
それが25小節、その先の29小節への盛り上がりに繋げられるとし、gを選んだ。
3拍目でニ短調に向かう準備としてそのIIの和音に切り替わっている。



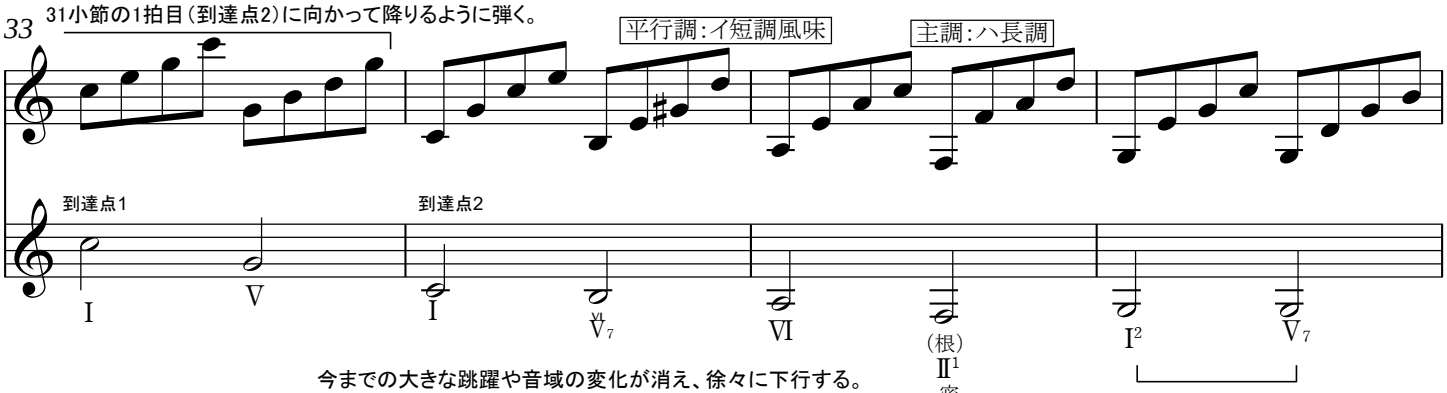
ここは転調ではなく、ハ長調内でⅡの副5と呼ぶべきだろう。
あるいは25小節3拍目裏ド♯を経過音としてそれすらも感じないという解釈もある。
ただ、29小節からの新しい展開前に一度調性を揺らしたかった事は間違いないと思う。
それがあまりにもさり気無いため、色々な見方が出来てしまう結果になったのだろうか。

27-29小節はハ長調の基本の和音を2小節続け、調性を定着。29小節、主調主音開始のために盛り上げている。

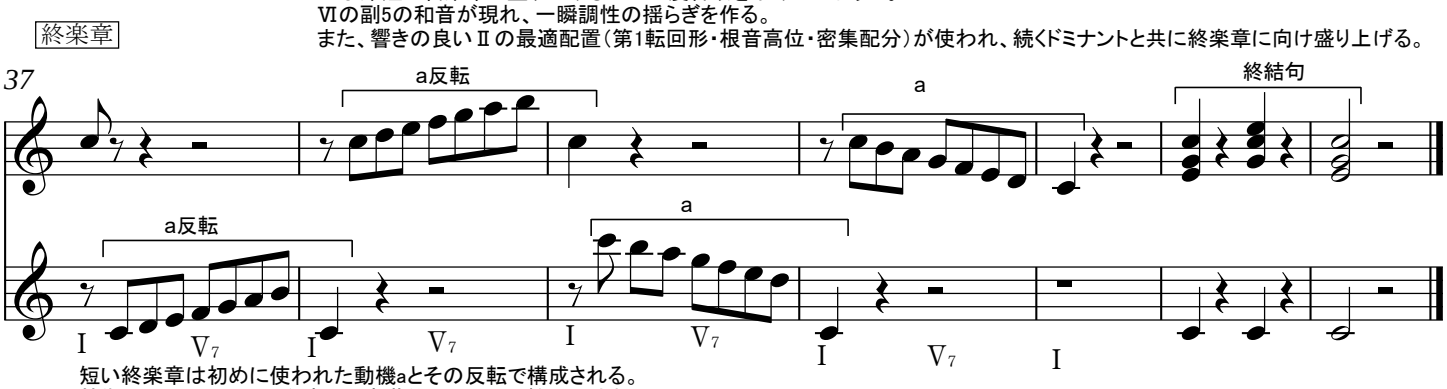


主調への回帰。第3部と言え、特徴は分散和音のみで構成。低音が旋律を担う。
今までは強拍で動機が終わる、という解釈が成り立っていたがここはそれがない。
強拍にある低音は開始音としてのみの役割を持ち、それ故アクセントをしっかりつける。
a、a'の時と異なりcを採用するならcの開始音に微かなアクセントをつけずに弾く。
29-30小節はハ長調のⅠとⅤの和音の基本形のみで構成されている。
低音の5度、4度の跳躍や音域の変化があるため、基本形でも充分な変化を感じる。
30小節低音の1拍目にくる最高音(到達点1)に向かい、
31小節の1拍目(到達点2)に向かって降りるように弾く。

29-30小節は音域の変化、跳躍はあるものの和音は全て基本形。
そのためか31-32小節は恐らく平行調イ短調のⅤの副5の和音を配置したり、
Ⅰの第2転回形と属7の和音でのDと言った和声的な変化の意図が見える。
それにより小節的な動機は3小節と長くなる。
低音の最高音「到達点1」に達するのを遅らせ、
エネルギーの溜めを作る目的もあるかもしれない。



今までの大きな跳躍や音域の変化が消え、徐々に下行する。
37小節短い終楽章で盛り上げるため一度音域を下げたいようだ。
Ⅵの副5の和音が現れ、一瞬調性の揺らぎを作る。
また、響きの良いⅡの最適配置(第1転回形・根音高位・密集配分)が使われ、続くドミナントと共に終楽章に向け盛り上げる。



短い終楽章は初めに使われた動機aとその反転で構成される。
特徴としてはハ長調の主音から音階的上行下行が繰り返される。
上行は最後の導音から短2度上の主音に解決せず、長7度下の主音に跳躍下行する。
下行も上主音(レ)から長2度下の主音に向かわず9度の下行跳躍が行われる。
この箇所の作曲的工夫であり、両者とも目的は終止感の先延ばしだろう。その先延ばしが3回行われる。焦らし上手だ。
だからこそ41小節1拍目のドで大きな到達感が出るのだろう。
演奏としては4小節1単位で長ーくアーティキュレーションを取るか、1小節で1単位としてそれを4回繰り返すか。
テンポに寄ってどちらを選ぶか変わってくるかもしれない。
いずれにしても「まだ終わらない、まだ終わらないよー」と焦らす気持ちがあると上手く表現できそうだ。
最後の主和音は第3音高位を挟んでおり、華やかに勢いを保ったまま弾きたくなる。もちろん収めても良いだろう。